

「車と相撲をとって勝つ人間はいないのです」

—平成・令和の過渡期に昭和からの願い

吉田英生（S53/1978卒）

平成31年4月19日（池袋）、同4月21日（三ノ宮）、令和元年5月8日（大津）—平成から令和の過渡期のわずか20日ほどの期間に、まったくなんの非もない歩行者が、暴走する車に轢かれるという痛ましい事故が続きました。私事で恐縮ですが、最初の池袋の事故で犠牲となった母子は筆者の娘や孫ともほとんど同年齢であり、10連休で浮かれていた世の中とは逆に、他人事と思えない暗たんたる気持ちでいたところ、さらに畳みかけるように二つの事故が続きました。令和の幕開けを同様な気持ちで過ごされた方も少なくないと思います。

「二度とこのような事故が起きないように…」といいつつ際限なく繰り返される悲惨な事故。とはいっても自分自身は細心の注意を払って運転する以外には何もできないのですが、せめてものこととして、とりわけこれからの時代を牽引していく若い方々に、現在ではあまり知られていないと思われる昭和の書と、個人的に感銘を受けた昭和の話を紹介させていただこうと思いました。

1. 宇沢弘文：自動車の社会的費用（岩波新書、S49年）

経済学者の宇沢氏（1928–2014）がシカゴ大学から東京大学に戻ったのがS43（1968）年。その6年後に当時の日本の交通事情（とりわけ狭い道で車と隣り合わせの歩行者の危険性）に衝撃を受けて警鐘を鳴らしたのが「自動車の社会的費用」でした。それから45年が経過した現在も状況はほとんど改善されていないように思えます（なお、同書でやはり問題にされた公害現象—排気ガス、騒音・振動—のうち、少なくとも前者に関しては技術者の努力でわが国では概ね解決されたと言えるでしょう）。同書から以下の三つの文章を引用させていただきます。

日本における自動車通行の特徴を一言に言えば、人々の市民的権利を侵害するようなかたちで自動車通行が社会的に認められ、許されているということである。

つい先だって、家の近くの道路で、小学生が学校の帰りに自動車に轢かれて死亡するという事故があった。（中略）事故の現場には数日間、花が供えられていたが、今ではその事故はすっかり忘れられてしまって、自動車がはげしく警笛をならしながら、歩行者を押しつけて走っている。このような自動車事故はいま日本国中でいたるところにおきていて、事故にあった被害者本人だけでなく、その

家族、友人の悲しみははかりしれないものがあるが、その悲惨さに対する人々の感覚はすっかり麻痺してしまっているように見える。

この横断歩道橋ほど日本の社会の貧困、俗悪さ、非人間性を象徴したものはないであろう。自動車を効率的に通行させるということを主な目的として街路の設計がおこなわれ、歩行者が自由に安全に歩くことができるということはまったく無視されている。あの長い、急な階段を老人、幼児、身体障害者がどのようにして上り下りできるのだろうか。横断歩道橋の設計者たちは老人、幼児は道を歩く必要はないという想定のもとにこのような設計をしたのであろうか。わたくしは、横断歩道橋を渡るたびに、その設計者の非人間性と俗悪さとおもい、このような人々が日本の道路の設計をし、管理をしていることをおもい、一種の恐怖感すらもつのである。

2. 読売新聞大阪本社「窓」編：大きい車どけてちょうだい（角川文庫、S59年）



昭和55年7月16日に堺市で6歳半の林 和也くんが車に轢かれてなくなりました。そのお母さんの知里さんが読売新聞社に投稿した記事で、長男の和也くんが最後に言った言葉

「大きい車どけてちょうだい」

が文庫本の副題になっています。この文庫本中の8ページを、涙なしに読むことはできないと思います。実は本稿のタイトルとして引用させていただいた

「車と相撲をとって勝つ人間はいないのです」

は知里さんの言葉です。なお、本書は現在では図書館あるいはamazonなどの古本でしか入手できませんが、インターネット上で関連情報（知里さんの手紙全文など）が入手できます（例えば <http://d.hatena.ne.jp/sessendo/20010513/p1> ）。

3. 運転免許試験場（東京府中）での自動車免許交付時の言葉（S53年）

三つ目は、筆者の忘れられない体験からです（詳細は、『忘れられない「贈られた言葉」』 http://www.wattandedison.com/okurareta_kotoba.pdf をご覧ください）。

運転免許証をもらって教室を出る直前のわたしたちに、白髪まじりのいがぐり頭でおおきな熊さんのようなおまわりさんが、次のように短く語ったのです。

「あなたたちはこれで運転免許証をもらって一般の道路に出て行く。これまでは、青信号は進め、赤信号は止まれだった。しかし、これからはそうではない。いったん道路に出たらいちばん大切なことは、事故から自分を守りまた相手を守ることだ。そのためには、青は必ずしも進めではない、赤は必ずしも止まれではない。青だって止まらなければならないときがある、赤だって進まなければならないときがある。以上、くれぐれも気をつけて。」

日本自動車工業会の統計によりますと、日本には現在、四輪車が約8000万台、二輪車が約1000万台、合計で約9000万台あるそうです。日本の人口が1億3000万人弱ですので、人口の実に7割に及ぶ車が狭い国土にあふれていることとなります。どうか、本当にこれ以上痛ましい事故が繰り返されないように、心から願う次第です。自戒の念を込めて。